

乳がんの組織分類

現在、日本で使用されている乳がんの組織分類は、日本乳がん学会編「臨床・病理乳がん取り扱い規約」によりますが、世界で広く使用されている WHO 分類との間には若干の解離があります。

乳がん取り扱い規約では乳がんは非浸潤がん noninvasive carcinoma と浸潤がん invasive carcinoma、パジェット病 Paget's disease に大別され、非浸潤がんは組織構造や細胞形態の特徴から非浸潤性乳管がん noninvasive ductal carcinoma(DCIS)と非浸潤性小葉がん lobular carcinoma *in situ* に分けられます。WHO の分類では非浸潤性乳管がんは乳管内増殖性病変 intraductal proliferative lesion の中に組み込まれています。通常型乳管過形成 usual ductal hyperplasia から平坦型上皮異型 flat epithelial atypia、異型乳管過形成 atypical ductal hyperplasia(ADH)、DCIS までを一連の病変ととらえた疾患概念です。

浸潤がんは通常型 common type と特殊型 special types に分類されます。乳がん取り扱い規約では通常型を乳頭腺管がん papillotubular carcinoma、充実腺管がん solid-tubular carcinoma、硬がん scirrhous carcinoma の3亜型に分類していますが、WHO 分類にはこの亜型分類はありません。浸潤性乳管がんの亜型による予後の差が報告されていますが、臨床上は画像診断や細胞診を行う際に組織型を念頭におくことの方が重要と思われます。

浸潤がんの特殊型は粘液がん mucinous carcinoma、髄様がん medullary carcinoma、浸潤性小葉がん invasive lobular carcinoma、扁平上皮がん squamous cell carcinoma 等が含まれます。

WHO 分類の Papillary carcinoma は取り扱い規約では乳頭腺管がんに分類されており、invasive ductal carcinoma with predominant intraductal component は浸潤性乳管がんの中で特に分類せず互換可能にしてあります。また取り扱い規約にはありませんが、WHO 分類にある invasive micropapillary carcinoma は一般的に悪性度が高いと考えられており注意が必要です。

炎症性乳がんは取り扱い規約の中では T4d に分類されています。発赤、疼痛、皮膚の浮腫や肥厚などの臨床所見を呈します。比較的まれな病型ですが予後不良で病理学的には血管新生や乳房皮膚真皮内のリンパ管侵襲が著明です。